

「教師の力量形成に関する研究—その2」

—学部教育への期待と提言—

A Study of Teachers' Ability Development - Part 2

Expectations and recommendations to the undergraduate education

中 根 政 美

Masayoshi NAKANE

概要

学校現場では、教員の大量退職、大量採用が続き、教員の経験年数の不均衡が顕著である。このため、従来のように、先輩教員から若手教員への知識・技能・指導方法等の伝承が、スムーズに機能しない状況があり、経験豊かな教員の指導力（力量）をどう若手教員に継承していくかが課題となっている。本研究では、現職の教員がどのように指導力を向上させてきたかを分析した「教師の力量形成に関する研究—その1」の成果を踏まえ、教育学部で教職を目指して学んでいる学部生の意識調査を行い、現職教員の意識との比較・分析を行う。現職教員の意識調査と学部生の意識調査を比較・分析することによって、今後、教職に就く学部生に有効な学びと必要な実践への提言を行う。そして、どのような資質と学びを期待するのかを考察し、教員養成を担う本学学部教育に期待されるものを提言する。

キーワード：大量退職、力量の継承、教員の意識調査、学部教育への期待

Abstract

In recent schools, a growing number of baby boom teachers reach the retirement age, while more and more new graduates are being employed as teachers. Because of the small number of mid-career teachers (middle leader), it is significant to consider how to pass down the knowledge and skills of experienced teachers to young teachers. This study carried out the survey with elementary school teachers on how their knowledge and skills have been formed. Then it discussed the results in terms of what is expected for teachers who will be employed in the future, as well as the teacher training in the education department of this university.

Keywords: increase of retirement, pass down of the knowledge and skills, survey on teach-

ers' perception, expectation for undergraduate education

目次

1. 研究の目的と方法
 - 1.1 研究の目的
 - 1.2 研究の方法
 - 1.3 先行研究の成果と課題
 - 1.4 調査の概要
2. 調査の結果と分析
 - 2.1 調査結果の集計
 - 2.2 集計結果と分析
3. 結果の考察と課題
 - 3.1 結果の考察
 - 3.2 今後の研究課題

1. 研究の目的と方法

1.1 研究の目的

学校現場では、教員の大量退職、大量採用が続き、教員の経験年数の不均衡が顕著である。文部科学省が3年ごとに実施している「学校教員統計調査」の「平成25年度学校教員調査（確定値）の公表について」（平成27年3月27日）によれば、幼稚園、小学校、中学校、高等学校では、(1) 教員の年齢構成について、30歳未満の比率が私立幼稚園を除く全ての学校種において前回調査時より上昇している。(2) 教員の採用者数は、私立幼稚園を除く全ての学校種において前回調査時より増加している。(3) 教員の離職者（定年退職者を含む）数は、全ての学校種において前回調査時より増加している、ことを明らかにしている。これらの傾向は、その後も一層進行しているものと考えられる。

この定年退職者を含む離職数の増加と、30歳未満の教員の増加は、小・中学校においては、中堅教員（ミドルリーダー）が極端に少ない状況となっている。従来のように、先輩教員から若手教員への知識・技能・指導方法等の伝承が、スムーズに機能せず、経験豊かな教員の指導力（力量）をどう若手教員に継承していくかが課題となっている。

こうした現状について、中央教育審議会は、答申「これからの学校教育を担う教員の資質向上について」（平成27年12月21日）で次のように述べている。「近年の教員の大量退職、大量採用の影響等により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり、

継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど、早急な対策が必要である」。

筆者は、「教師の力量形成に関する研究—その1 ～学部教育に期待されるもの～」（「共栄大学研究論集 第14号（2016）」）において、現職の教員（管理職、養護教諭を含む）が、どのように教員としての指導力（力量）を形成してきたのかを、現職教員の意識調査の結果分析を通して明らかにし、今後採用される若い教員にどのような資質と学びが期待されるのかを考察した。それによれば、現職の教員が教員としての指導力（力量）形成に最も大きな影響を与えたのは、「校内の優れた先輩や指導者との出会い」であり、教員の指導力（力量）向上のために心掛けていることは「教材の開発や研究を積極的に行ってきたこと」であった。

本研究では、現在、教員を目指して学んでいる現役の教育学部生に、現職の教員に実施した意識調査を実施し、その結果を比較分析する。このことによって、教員を目指す学部生の意識と、現職の教員の意識が、一致しているか。一致していないとすれば、どのような意識上の相違があるのか。そして、今後、教員として指導力（力量）形成に努力して行くにあたり、学部時代にどのような学びと体験が求められ、期待されているのかを明らかにする。また、学部教育として、どのようなカリキュラム改善や養成教育が期待されているのかを提言していきたい。

1.2 研究の方法

「教師の力量形成に関する研究—その1」で実施した、現職教員に対するアンケート調査を、教師を目指す教育学部生に対して実施し、その結果を集計し、比較分析する。調査対象の教育学部生は、本学部の2年生、3年生とし、調査協力者数は、2年生103名（男子66名、女子37名）、3年生133名（男子85名、女子48名）、合計236名であった。

質問紙は、現職教員と同様の様式、内容とした。ただし、現職教員に対する質問項目のうち、「力量形成に影響を生み出したと思われる項目」は「力量形成に影響を与えられる項目」に。「よい授業をするために心掛けていること」は「よい授業をするために心掛けていくと思われること」とした。また、新たに「今後、新採用教員として勤務するとした時、経験豊かな先輩教員から、どのようなことを学びたいですか」という質問項目を加えた。

なお、本論中、教員の指導力を「指導力（力量）」と表記したが、「指導力」と「力量」は同義である。また、「教員」「教諭」「教師」は使い分けず、概ね専門性の高い職種と考えられる場合には「教師」とし、「中央教育審議会答申」等に関連する職種としては「教員」と表記した。さらに、固有名詞となっている「養護教諭」「臨時的任用教員」などは、そのままの表記とした。

1.3 先行研究の成果と課題

教員の力量形成に関する研究は、その重要性から多くの研究がなされている。しかしながら、教員を目指す学部生を調査対象とし、現職教員の意識調査との比較を通して、教員を目指す学部生に求められる養成教育に関する研究は多くないと思われる。

埼玉大学教育学部は、『「力量のある質の高い教員」を目指す養成・研修の在り方に関する調査研究』を報告書(平成24年4月)としてまとめている。埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会と協力し、採用試験受験者142名、採用された教員87名に3年間にわたる追跡調査を行い、初任者研修制度を含め、力量形成への有効性を調査分析している。その中で、教員に採用された初任者を調査対象とし、学部時代の「学校フィールド・スタディ A(授業補助等)」「学校フィールドワーク B(校内研修等参加)」「教職支援セミナー」への参加率と教員採用試験合格との相関関係を分析し、学校外での学びや体験が効果的であることを明らかにしている。

青木幸子(東京家政大学)は、教員の実践的指導力の育成が要請されてきた背景を探り、養成段階で育むべき「実践的指導力の一端を明らかにしていく」(『教員養成課程で育成すべき能力と実践的指導力』、2009)研究を行っている。そのため「中央教育審議会答申」や「教師養成塾」の分析を通して、教員養成を大学で行うことの意義について「将来にわたる職能成長を保証する素地としての基本的能力を培っていくことが養成課程に課せられた実践的能力への対応」であるとしている。

国立教育政策研究所は、平成23年(2011年)3月に「教員の質の向上に関する調査研究報告書」を発行した。その中の「優秀教員の力量形成に関する調査」において「小中高大の時代の経験が教員としての自分に影響を与えている出来事」の質問紙調査を行い、大学時代もっとも影響を与えた出来事は、「友人関係」「大学での経験」「教師の人柄」であったことを明らかにしている。また、「教員としての自分に影響を与えた大学の教育課程」では、「教育実習先で出会った教師」「教育実習先で出会った児童生徒」「教育実習先での授業実践」と、いずれも、教育実習での経験が上位を占めていることを明らかにした。この研究成果は、中央教育審議会教員養成部会の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」の答申に生かされた研究成果である。しかしながら、研修機会が限られる中で、日常の教育活動に取り組み、児童生徒に向き合っている一般教員の力量形成に関する意識の研究も、養成教育に活かされるべきと考える。

このように、教員養成機関としての学部教育に求められる「教師としての指導力(力量)形成」に関する研究は、さまざまな視点から行われている。本研究では、日々児童生徒に向き合い指導に当たっている現職教員の意識調査結果(平成26年度実施)と、教員を目指して学んでいる学部生の意識調査結果(平成28年度実施)を比較分析することによって、教員養成学部教育に、何が求められ、何が期待されているのかの提言を行い、本

学教員養成に活かすことを目的とする。

1.4 調査の概要

1.4.1 調査時期と調査対象

- (1) 調査時期 平成28年5月（本学教育学部 3年生）
平成28年9月（本学教育学部 2年生）
- (2) 調査対象 本学教育学部 3年生 133人（男子85人、女子48人）
本学教育学部 2年生 103人（男子66人、女子37人）

※なお、現職教員の「意識調査結果」（平成26年実施）の調査対象は93人。

1.4.2 フェイスシート

学部生に対するアンケート調査用紙のフェイスシートは、学年、性別、年齢、とした。平成26年に実施した現職教員用アンケート調査用紙のフェイスシートは、本採用年度、教職経験年数（臨時的任用期間も合算）、最終学歴、受講した主な研修会、であった。

1.4.3 回答者のプロフィール

（性別、調査対象人数）

分類	大学2年生	大学3年生	合計
男子	66人	85人	151人
女子	37人	48人	85人
合計	103人	133人	236人
内教員免許取得意向者	103人	133人	236人

1.4.4 教師になるまでの分析

教師になろうと決意した時期、教師を目指したきっかけ、教師になることを決意した理由、小学校、中学校、高等学校、大学等で影響を受けた出来事等は、今後、教員としての力量形成に、一定の影響を与えていくものとする。特に、早い時期から教師を目指していれば、大学等での学ぶ姿勢や意欲にも好影響を与えていくのではないかととらえ、比較分析の対象とした。

1.4.5 力量形成に影響を与えたと考えられる事項の分析

教員としての力量形成に影響（効果）するであろうと思われる事項の分析は、本研究の主たる目的である。教員を目指す学部生が、教員として採用されたとしたら、どのような経験や学びを通して、教員としての指導力（力量）を形成できると考えているか。現職教員が影響を受けてきたと思われる事項と一致するのか、しないのかを比較分析することによって、学部生の今後の学びに有効な示唆を与えることになると考える。

1.4.6 教師として、心掛けていることの分析

教員を目指す学部生が、教師に採用されたとして、常にどのようなことに心掛けていく

と思うかの分析は、今後、学部生が学部時代に、どのような学びや体験に力を入れていくことが有効かの示唆を与えるものとする。

1.4.7 教員の力量として、何が重要なのかの分析

教員を目指す学部生が教師になった時に、教員の指導力（力量）形成にとって、どのような力量を重視し、向上させていくことが重要なのかの意識を分析することもまた、今後の学部生の学習に重要な示唆を与えるものとする。現職教員が重視している力量との比較分析もまた、学部生の今後の学びに活かせるものとする。

1.4.8 経験豊かな先輩教師から学びたいことの分析

学部生が新採用教員になったとした時に、経験豊かな先輩教員からどのようなことを学びたいかの分析もまた、教師を目指す学部生の今後の学びに大きな影響を与えるものとする。さらに、この集計結果は、学部教育の改善にも繋げることができるものと考え、分析の対象とすることとした。

2. 調査の結果と分析

2.1 調査結果の集計

調査結果の集計は、回答（選択肢）が一つの質問、複数の質問とも、選択された度数をそのまま表示した。また、複数回答（選択等）のうち、順位を付けて回答されたものは、1位選択が3ポイント、2位選択が2ポイント、3位選択が1ポイントとして集計した。

なお、各質問の集計結果は、「男子大学生」と「女子大学生」「現職教員」とした。大学生を男女別に集計する理由は、教師になることを決意した理由などで、小学校時代の教師との関わりや印象に、少なからず差異が見られたからである。選択された項目の度数順位での逆転はほとんど見られないが、教師になろうと決めた理由や教員の力量形成上の重要度選択でも差異が見られる。今後の継続的な研究対象とするためにも、本研究では、男女を分けて集計し分析することとした。

また、調査対象人数（母数）に差があるため、集計結果の表示は、割合と度数が表示されるよう「横帯グラフ」とした。最後の、学生に対する「あなたが、今後、新採用教員として勤務するとした時、経験豊かな先輩教員から、どのようなことを学びたいですか」の回答のみ、横棒グラフで表示し、軽重を比較しやすいようにした。

2.2 調査結果と分析

2.2.1 質問1 あなたが教師になろうと決めた時期は、いつ頃でしたか。

- ア 小学校時代 イ 中学校時代 ウ 高校時代 エ 大学への入学直後
オ 大学時代（教育実習の前から） カ その他

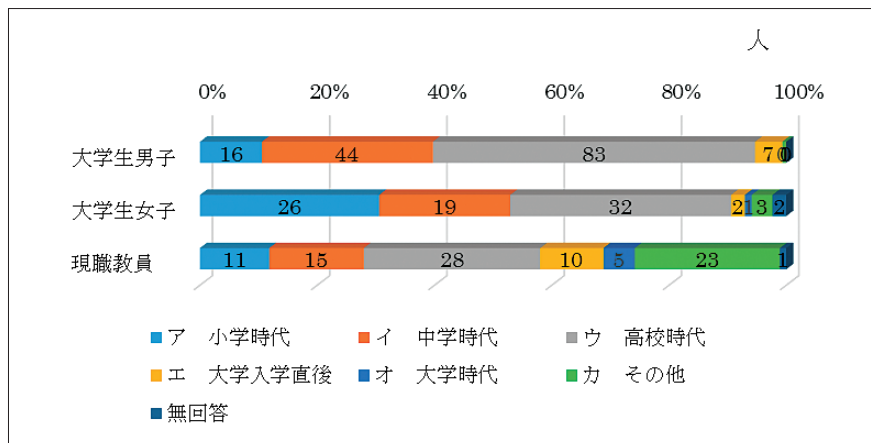


図 2.2.1 教師を決意した時期

- 大学生（男子）1位：ウ「高校時代」（83人 55.0%）
 2位：イ「中学校時代」（44人 29.1%）
 3位：ア「小学校時代」（16人 10.6%）
- 大学生（女子）1位：ウ「高校時代」（32人 37.6%）
 2位：イ「小学校時代」（26人 30.6%）
 3位：ア「中学校時代」（19人 22.4%）
- 現職教員 1位：ウ「高校時代」（28人 30.1%）
 2位：イ「中学校時代」（15人 16.1%）
 3位：ア「小学校時代」（11人 11.8%）

どの時点で教職を目指したのかは、その後の教師になるための努力への意欲に強く関わってくるものと考えられる。現職教師への調査では、教育実習の経験も大きいものと考え、選択肢に「大学時代（教育実習終了後）」「大学時代（卒業の時）」「教職に就いてから」を加えて調査している。今回調査の教育実習前の大学生においては、教育実習終了後からの選択肢は削除して調査したが、男女とも、現職教員と同様に、「高校時代」が最多であった。第2位は、本調査全般にわたって、男女大学生の順位の差異が見られない中、唯一、2位以下に差異が見られた。男子が「中学校」であったのに対して、女子は「小学校」をあげ、第3位が「中学校」であった。男子は、第2位が「中学校」、第3位が「小学校」であり、現職教員の結果と順位が同様であった。

このことから、大学生女子は、小学校時代という早い時期から教職を目指す傾向が強かったと言える。このことは、女子の方が、学校の教師などとの関わりが深く、担任教師等との関わりが心情的にも身近で、親しみやすい傾向があったからではないかと考える。また、大学生男子、大学生女子、現職教員とも、教師になろうと決めた時期の最多が、「高校時代」となっていることから、教師を目指した学生も現職の教師も、「将来は教

師に」なるとの目的を持って大学に進学したことが推測される。目的無く教員養成関係学部に入學したのではなく、ほぼ、将来は「教師になりたい」という希望を持って教員養成大学等に進学したと言えるのではないだろうか。それだけに、大学等の教員養成機関には、学生の希望実現の為に、教師への道に繋がる様々なカリキュラムや体験制度を整備し、充実させていくことが求められていると考える。

2.2.2 質問2 教職を目指したきっかけを、次のうちから2つ以内選んでください。

- ア 教師との出会い (小、中、高)
- イ 周囲の人 (特に) の勧め
- ウ 大学や学部の選択
- エ 教育系大学等への入学へのあこがれ
- オ 職の安定性、将来の経済的安定性
- カ 家業の継続を避けるため
- キ 家業を継ぐため
- ク その他 ()

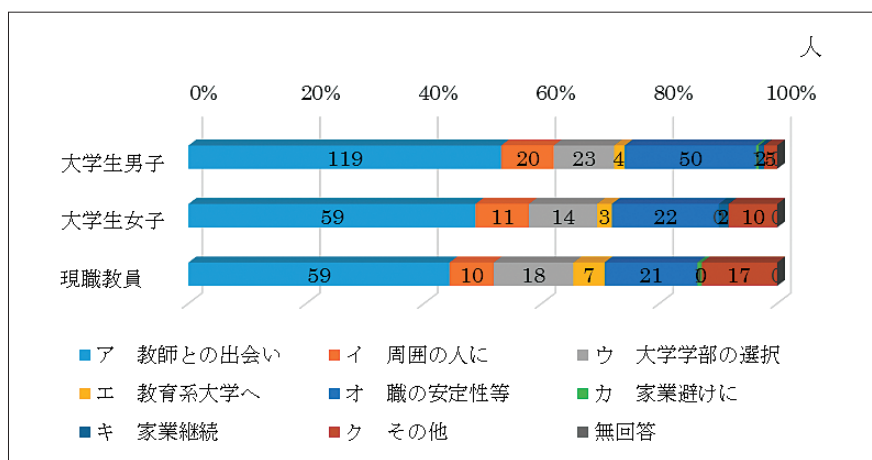


図 2.2.2 教師を目指したきっかけ

- 大学生 (男子) 1位: ア「教師との出会い」 (119人 78.8%)
- 2位: オ「職、将来の安定性」 (50人 33.1%)
- 3位: ウ「大学・学部の選択」 (23人 15.2%)
- 大学生 (女子) 1位: ア「教師との出会い」 (59人 69.4%)
- 2位: オ「職、将来の安定性」 (22人 25.9%)
- 3位: ウ「大学・学部の選択」 (14人 16.5%)
- 現職教員 1位: ア「教師との出会い」 (59人 63.4%)
- 2位: オ「職、将来の安定性」 (21人 22.6%)
- 3位: ウ「大学・学部の選択」 (18人 19.3%)

教師を目指すきっかけもまた、その後の教師になるための努力に大きな影響を与えるものと思われる。集計結果は、大学生男女、現職教員とも、「教師との出会い」が第1位であり、2位「職、将来の安定性」、3位「大学・学部の選択」となっている。中でも、「教

師との出会い」が、教師を目指すきっかけとなっていることは、教職そのもののもつ「魅力」「やりがい」が、教職を目指す学生にも支えとなっているのではないかと考える。翻って、であるからこそ、教師は、児童生徒に大きな影響を与え、人間的成長や人格の完成にも係わる職業だという重みを、教職を目指す学部生に伝えていく責務が、大学学部教員にはあると考える。

なお、第2位に「職の安定性、将来性」が選択されているが、課題の多さと多忙さが指摘される教師という職業ではあっても、選択される理由の一つになっていると考える。今後の教師を目指す学生のためにも、安定して教職という職務を遂行できる制度の維持が求められていると考える。

また、その他の回答内容で、「子どもが好き（多数）」「子ども達に伝えたいものがあった」「子どもとのふれあい」「出会い」「弟（妹）の勉強をみたから」「一番身近な職業だったから」「バスケットボールを教えたかったから」「妹の成長をみて」「職業体験をして」「社会貢献になると考えたから」「ボランティアへのあこがれ」「ボランティアを通して」「高校でのふれあい体験」「自分の特技が活かせると思ったので」と、選択肢とは違った視点から記述してくれた回答が多かった。

一方で、「それまでに出会った教師のようにはなりたくなかった」の回答も1名おり、考慮しなければならないと考える。改めて、教員養成学部として、教師を目指す学部生の意欲を強め、支援できるような体制を充実させていくことが求められていると考える。

2.2.3 質問3 あなたが、教職を目指した理由を、次のうちから2つ以内選んで、○をつけてください。(複数選択)

- | | |
|--------------------|---------------|
| ア 仕事のやりがい | イ 教えることが好き |
| ウ 教師へのあこがれ | エ 経済的な安定 |
| オ 教師以外の仕事が考えられなかった | カ 家業の継続を避けるため |
| キ 家業を継ぐため | ク その他 () |

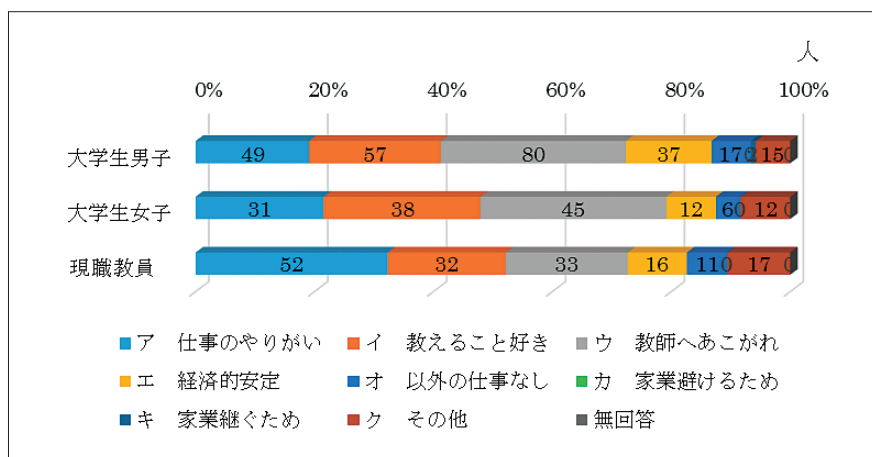


図 2.2.3 教師を目指した理由

大学生(男子)	1位:ウ「教師へのあこがれ」	80人
	2位:イ「教えることが好き」	57人
	3位:ア「仕事のやりがい」	49人
大学生(女子)	1位:ウ「教師へのあこがれ」	45人
	2位:イ「教えることが好き」	38人
	3位:ア「仕事のやりがい」	31人
現職教員	1位:ア「仕事のやりがい」	52人
	2位:ウ「教師へのあこがれ」	33人
	3位:イ「教えることが好き」	32人

現職教員との意識の違いが大きく現れたのが、この項目である。現職教員は、「仕事のやりがい」「教師へのあこがれ」「教えることが好き」を上位順としたが、大学生は男女共、「教師へのあこがれ」「教えることが好き」「仕事のやりがい」を上位順とした。度数に極端な差は見られないが、現職教員が、日々の教育活動に追われる中で、「仕事へのやりがい」を支えとしていることの現れではないだろうか。一方、大学生は、純粋に「教職へのあこがれ」を持ち「教えること」が教師としてのやりがいであると捉え、努力しようとしていると考えて良いのではないだろうか。「教師」という職業を目指す学部生にとって、重要な意識であると考えられる。

なお、学部生の回答で「その他」の内容は、多岐に渡った。「子どもが好き。16人」「算数の学力向上のため」「親の影響」「未来をつくるため」「母に教師を勧められたから」「子どもと接するのが好き」「自分のような子を救うため」など、やりがいや使命感を感じさせる意識のものが多く記述された。一方で「ずっとなりたかったものが、なくなってしまったから」「他の職業を知らない」「見返すため」などの記述もあった。

2.2.4 質問4 あなたが経験された、小学・中学・高校・大学時代の経験で、教員を目指す上で、自分に影響を与えていると思われる出来事をそれぞれ、1つ選んでください。

小学校時代	ア 授業	イ 教師の人柄	ウ 学校での経験	エ 学校外での経験
	オ 友人関係	カ その他()		
中学校時代	ア 授業	イ 教師の人柄	ウ 学校での経験	エ 学校外での経験
	オ 友人関係	カ その他()		
高校時代	ア 授業	イ 教師の人柄	ウ 学校での経験	エ 学校外での経験
	オ 友人関係	カ その他()		
大学時代	ア 授業	イ 教師の人柄	ウ 大学での経験	エ 大学外での経験
	オ 友人関係	カ その他()		

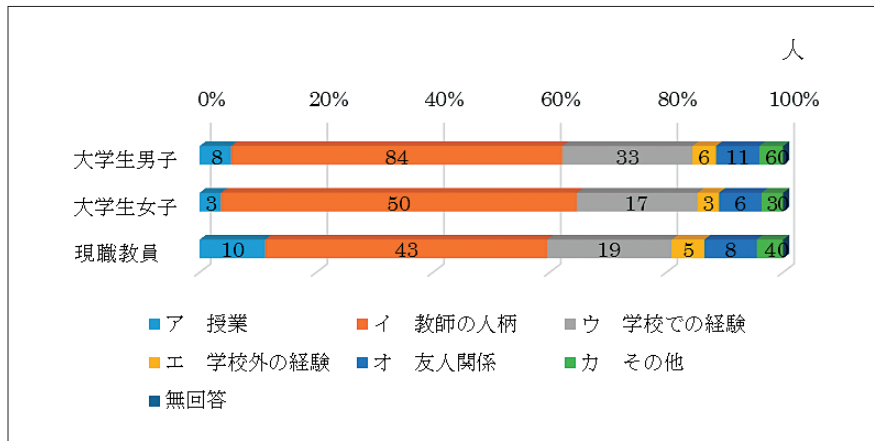


図 2.2.4.1 影響を与えた出来事（小学校）

大学生（男子）	1位：イ「教師の人柄」	84人
	2位：ウ「学校での経験」	33人
	3位：オ「友人関係」	11人
大学生（女子）	1位：イ「教師の人柄」	50人
	2位：ウ「学校での経験」	17人
	3位：オ「友人関係」	6人
現職教員	1位：イ「教師の人柄」	43人
	2位：ウ「学校での経験」	19人
	3位：ア「授業」	10人

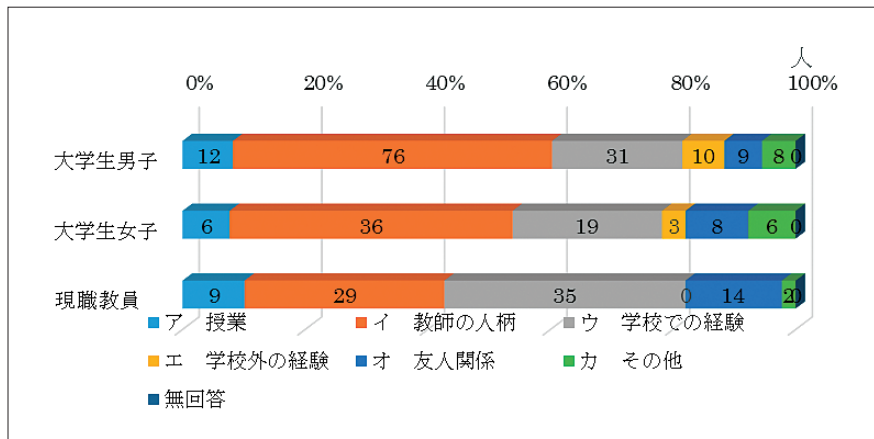


図 2.2.4.2 影響を与えた出来事（中学校）

大学生（男子）	1位：イ「教師の人柄」	76人
	2位：ウ「学校での経験」	31人
	3位：ア「授業」	12人
大学生（女子）	1位：イ「教師の人柄」	36人

	2位：ウ「学校での経験」	19人
	3位：オ「友人関係」	8人
現職教員	1位：イ「学校での経験」	35人
	2位：イ「教師の人柄」	29人
	3位：オ「友人関係」	14人

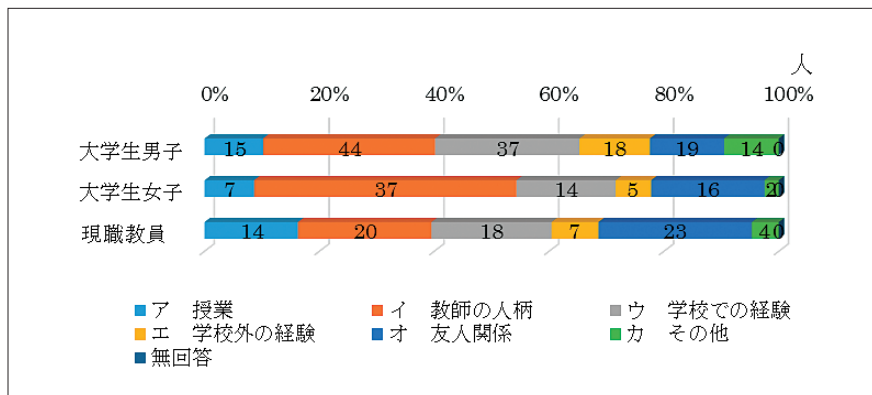


図 2.2.4.3 影響を与えた出来事 (高校)

大学生 (男子)	1位：イ「教師の人柄」	44人
	2位：ウ「学校での経験」	37人
	3位：オ「友人関係」	19人
大学生 (女子)	1位：イ「教師の人柄」	37人
	2位：オ「友人関係」	16人
	3位：ウ「学校での経験」	14人
現職教員	1位：オ「友人関係」	23人
	2位：イ「教師の人柄」	20人
	3位：ウ「学校での経験」	18人

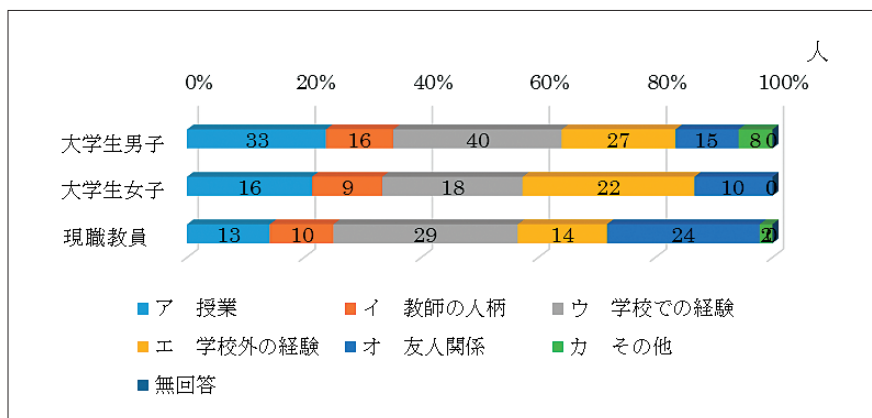


図 2.2.4.4 影響を与えた出来事 (大学)

大学生（男子）	1位：ウ「学校での経験」	40人
	2位：ア「授業」	33人
	3位：エ「学校外での経験」	27人
大学生（女子）	1位：エ「学校外での経験」	22人
	2位：ウ「学校での経験」	18人
	3位：ア「授業」	16人
現職教員	1位：ウ「学校での経験」	29人
	2位：オ「友人関係」	24人
	3位：ウ「学校での経験」	14人

小学校教員を目指す学部生にとって、どのようなできごとが、意識形成に係わってきたかの結果から、いくつか特徴的な傾向がつかめる。

- ① 小学校段階では、大学生男女、現職教員とも、「教師の人柄」が最多である。如何に小学校段階における教師の果たす役割が大きいかが見て取れると考える。
- ② 中学校段階では、大学生男女は、「教師の人柄」を最多としているが、現職教員は、「学校での経験」を最多としている。学校での経験の多くは「部活動」「学校行事」と思われるが、現職教員にとっては、日々の教育活動の中で、学校行事に関わっていることの表れではないかと考える。また、学校行事の指導の重みが、「学校での経験」の選択に繋がっているのではないかと考えられる。
- ③ 高校段階でも、大学生男女と現職教員の意識に差が見られる。大学生は「教師の人柄」を最多としているが、現職教員は、「友人関係」を最多としている。「教師の人柄」とは僅差であるが、現職教員が小学校段階で受けた教師の人柄に比して、高校段階では、小学校ほど教師と児童生徒との関係が強いとは感じていないのではないだろうか。興味深い傾向である。

なお、小学校教員を目指す学部生にとって、自らが持っている「教師の人柄」の影響度が、そのまま教師となった時に活かされてくるのではないだろうか。目指す教師像の原点になることを期待したい。

また、大学生男女の大学等段階では、「授業」「学校での経験」「学校外での経験」が、ほぼ同様の傾向を示している。大学における幅広い経験が教師としての指導力（力量）形成に好影響を与えていくものと考えられる。

2.2.5 質問5 あなたが教職に就いたとして、教師としての指導力や力量形成に影響を与えと思われる事柄を、あなたにとって意味の大きい順に1位から3位までをあげてください。

() ア 教育実践上の経験（生徒指導、低学年指導、特定の子どもとの出会い、など）

- () イ 学校への赴任
- () ウ 学校内での優れた先輩や指導者との出会い
- () エ 学校外での優れた教員・人物との出会い
- () オ 学校内での研究活動(校内研修、研究発表会、初任者研修、など)
- () カ 学校外での研究活動(各種教育研究団体、長期研修、各種講習会、など)
- () キ 市教育研究会、教育研究集会などの団体内での活動
- () ク 社会的運動(スポーツやボランティア活動など)
- () ケ 地域と学校への着目(地域の課題)
- () コ その他()

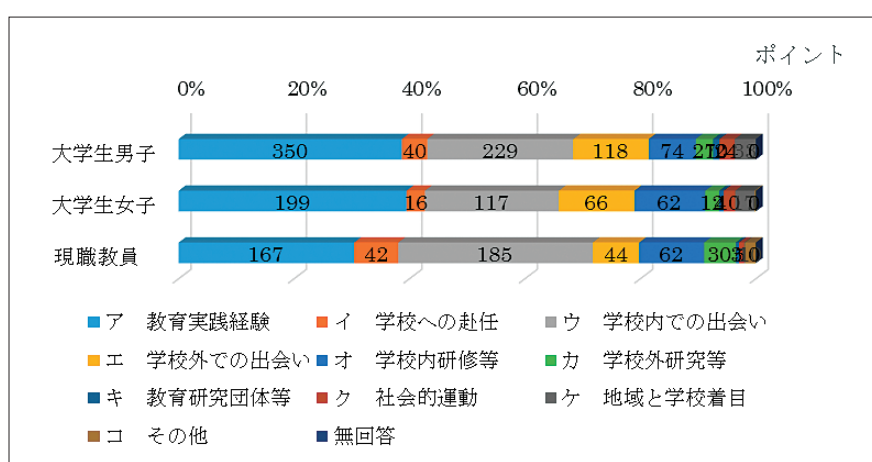


図 2.2.7 力量形成に影響(する)したもの

- 大学生(男子) 1位:ア「教育実践の経験」 350ポイント
- 2位:ウ「学校内での出会い」 229ポイント
- 3位:エ「学校外での出会い」 118ポイント
- 大学生(女子) 1位:ア「教育実践の経験」 199ポイント
- 2位:ウ「学校内での出会い」 117ポイント
- 3位:エ「学校外での出会い」 66ポイント
- 現職教員 1位:ウ「学校内での出会い」 185ポイント
- 2位:ア「教育実践上の経験」 167ポイント
- 3位:オ「学校内研修等」 62ポイント

3項目以内での順位を付けての選択であるが、現職教員では圧倒的に「学校内での優れた先輩や指導者との出会い」が上位であった。特に、初任の学校での出会いが大きな影響を与えたものと考えられるが、改めて、教育が理論を基盤とした上で、実践であるということ、意識調査からも伺えた。多くの児童生徒を対象とし、一人一人の個性や理解力に

も差がある中、校内（近く）の指導力（力量）ある先輩教師からの学びとアドバイスが、教師としての指導力（力量）形成に大きな影響を与えたことが読み取れる。

また、現職教員は、第2位に「教育実践上の経験（生徒指導、低学年指導、障がい児指導、特定の子どもの出会い、など）」を挙げたが、様々な教育実践を通して教員としての指導力（力量）を形成してきたことを再確認できる。特に、困難な課題への対応を通して、力量を向上させることができた経験は、どの教員も持つものである。第3位は「校内研修、研究発表会、初任者研修など」の学校内での経験であったが、教育実践上の経験と不可分であり、教員としての実践力を高めていく基盤であると考えられる。第4位に、「学校外での研究活動（各種教育研究団体、長期研修、各種講習会、など）」であったが、学ぶ姿勢を持ち、学ぶ機会を生かすことの重要性を示していると思われる。

この現職教員の意識調査結果に対して、大学生男女には、「教職に就いたとして」と仮定の質問であった。結果は、男女共「教育実践の経験」「学校内での優れた先輩や指導者との出会い」を選択している。本学部で3年生で実施される「教育実習」を、まだ経験していない2年生、3年生が、真剣に児童生徒と向き合う学校現場を考える時、妥当な選択であると考えられる。学校現場での指導力（力量）向上を認識することが、大学学部生としての学びに好影響を与えるものと考えられる。

2.2.6 質問6 あなたが、よい授業実践をするために日頃心がけていくと思われることを、1位から3位までの順をつけてあげてください。

順

- ア 研究授業などをできるだけするようにしている。
- イ 多くの授業を参観するようにしている。
- ウ 教材の開発や研究を積極的にしている。
- エ 記録を継続的にとり、子ども理解に努めている。
- オ 前の授業の振り返りを生かして授業改善している。
- カ 実践記録を書き、授業を振り返っている。
- キ 研究会や学会に積極的に参加している。
- ク 教育関係の本や雑誌を常に読むようにしている。
- ケ 常に自分で課題を見つけ、授業の改善に向けた努力をしている。
- コ その他（ ）

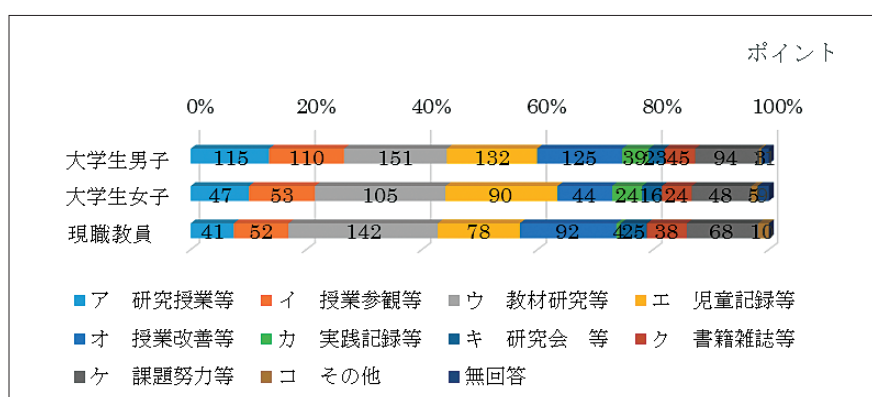


図 2.2.8 心掛けていると思うもの

大学生（男子）	1 位：ウ「教材研究等」	151 ポイント
	2 位：エ「児童記録等」	132 ポイント
	3 位：オ「授業改善等」	125 ポイント
大学生（女子）	1 位：ウ「教材研究等」	105 ポイント
	2 位：エ「児童記録等」	90 ポイント
	3 位：イ「授業参観等」	53 ポイント
現職教員	1 位：ウ「教材研究等」	142 ポイント
	2 位：オ「授業改善等」	92 ポイント
	3 位：エ「児童記録等」	78 ポイント

現職教員が、どのように指導力を向上させてきたかの分析結果は、「教材の開発や研究を積極的にしている」（142 ポイント）が最多で極めて高い比率を示していた。何よりも、授業で児童を引きつけ、理解させるか、教員としての使命を自覚しての姿勢である。次に「実践記録を書き、授業を振り返っている」（92 ポイント）である。授業改善、指導法改善のために重要なことであり、力量ある教師は、必ず習慣化している方法と思われる。3 位は「記録を継続的にとり、子ども理解に努めている」（78 ポイント）であった。授業の充実のためには、児童一人一人の理解度や習熟度に目を向け、その後の授業改善に生かそうとするものであり、今後、教師を目指す教育学部生にとって大いに参考になる結果であった。この結果に対して、大学生は男女共、「教育実践による経験」が最多で、「学校内での優れた先輩、指導者との出会い」を最多とした現職教員の結果と相違した。このことは、大学生が、真剣に「まず、授業」をとの意識を強く持っていることの表れではないかと考える。大学生男女の第 2 位は、いずれも「学校内での出会い」を選択しており、大学生もまた優れた先輩教師や指導者から学ぶことが多いであろうことを自覚している表れであると考えられる。いずれにしても、この項での分析は、教師としての「指導力（力量）向上」に向けて、大きな示唆を与えるものである。

2.2.7 質問7 あなたは、教員としての力量としてどのようなものが重要だとお考えですか。1位から3位までの順をつけて、あげてください。

- () ア わかりやすく授業を展開していく力（教材のくみだて、話し方、板書）
- () イ 子どもの学習状況、悩み、要求、生活状況などを適切に把握する力
- () ウ 子どもに積極的に関わっていく熱意や態度
- () エ 子どもの資質、適性を見抜く力
- () オ 子どもの思考や感情を触発し発展させる教師の表現力
- () カ 子どもの集団を把握し、まとめていく力
- () キ 子どもの問題や学校の問題を広い視野から見ることのできる度量の広さ
- () ク 必要に応じて、子どもに対して毅然たる態度を取ることができる強さ
- () ケ 芸術や文学に対する豊かな感性や理解
- () コ 同僚と協力しながら教師集団の質を高めていく力
- () サ 教科書の中の教材を様々な角度からとりあげて指導する力
- () シ 教育に関する諸問題を自分なりに筋道を立てて論理的に考えることのできる力
- () ス 教師自身の体育、音楽、図工などの実技能力
- () セ 学校全体の中で自己を位置づけ、その立場から考える力
- () ソ 学校の課題とは直接の関連はないが、自分にとって関心のある学問や研究を深めていくこと
- () タ その他 ()

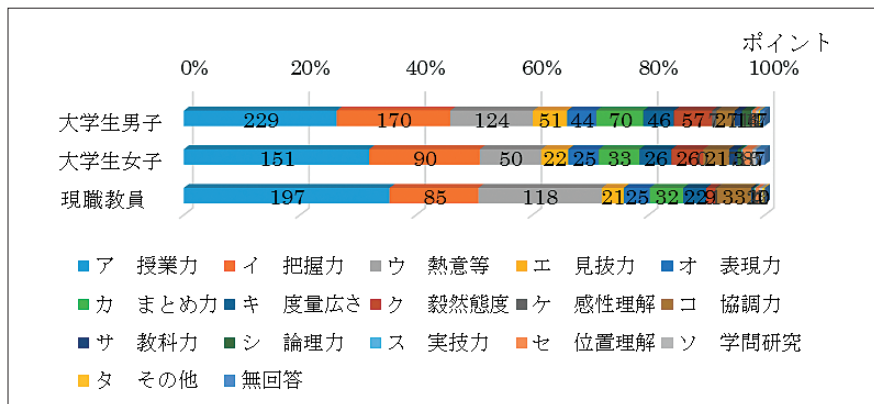


図 2.2.9 重要だと考える力量

大学生（男子）	1位：ア「分かりやすい授業展開力」	229 ポイント
	2位：イ「児童の状況課題の把握力」	170 ポイント
	3位：ウ「子どもに関わる熱意態度」	124 ポイント
大学生（女子）	1位：ア「分かりやすい授業展開力」	151 ポイント
	2位：イ「児童の状況課題の把握力」	90 ポイント
	3位：ウ「子どもに関わる熱意態度」	50 ポイント

現職教員	1位：ア「分かりやすい授業展開力」	197ポイント
	2位：ウ「子どもに関わる熱意態度」	113ポイント
	3位：イ「児童の状況課題の把握力」	85ポイント

現職教員が、自己の経験を踏まえた上で、教員の力量として、どのような力を重視しているかを問うたものである。教員養成学部にとっては、重要な示唆となると考える。

現職教員の最多は、「分かりやすい授業を展開していく力」で突出している。教師として最も重要な職務は、授業の指導力であり当然の結果でもある。この指導力（力量）をどう身に付けていくか。その基盤となるものを、学部教育でどのように身につけさせていくのかである。

第2位の「子どもに積極的に関わっていく熱意や態度」は、教師としての意欲と姿勢が重要であることを示唆している。教員の多忙化が指摘される中、日々児童生徒に向き合う教師の姿勢を支えるのは、まさに「教育への熱意」とやりがいであると思われる。第3位の児童の「把握力」は、児童理解力であり、児童生徒一人一人に応じた指導に取り組もうとする教員の姿勢が読み取れる。

大学生は男女共、現職教員と同様に「分かりやすい授業展開力」を最多としている。学部生が最も気にかけることになる「授業力」について、真剣に意識している姿勢が伝わってくる。以下、2位、3位とも、現職教員と同様の選択であった。

2.2.10 質問8 あなたが今後新採用教員として勤務するとした時、経験豊かな先輩教師から、どのようなことを学びたいですか。1位から3位までの順をつけてあげてください。

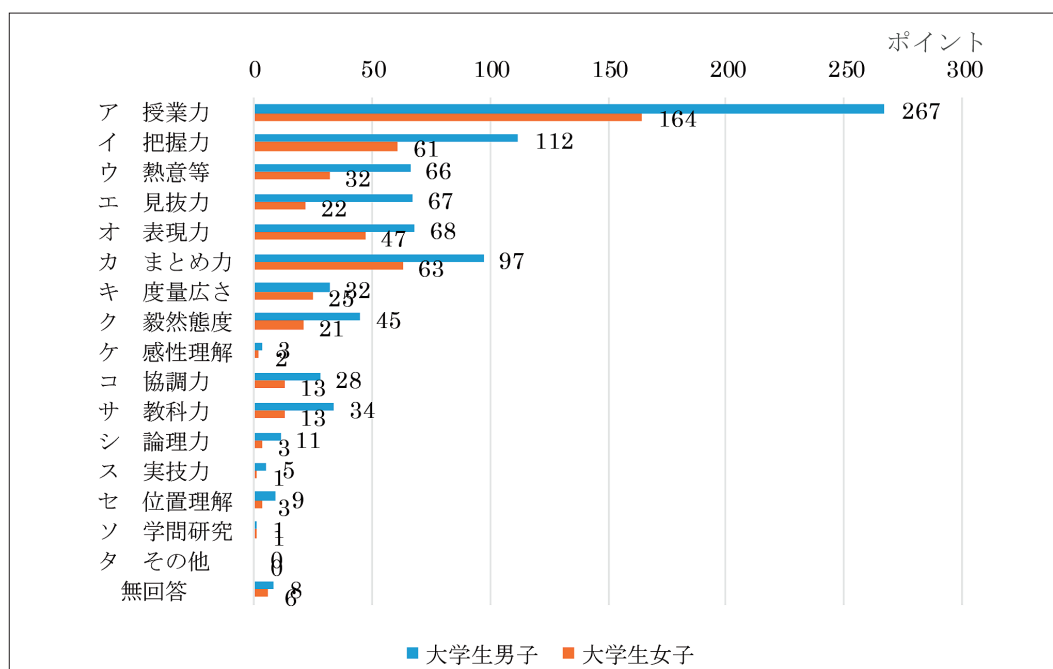


図 2.2.10 教師になったら学びたいこと

大学生（男子）	1位：ア「分かりやすい授業展開力」	267ポイント
	2位：イ「児童の状況課題の把握力」	112ポイント
	3位：カ「把握し、まとめていく力」	97ポイント
大学生（女子）	1位：ア「分かりやすい授業展開力」	164ポイント
	2位：カ「把握し、まとめていく力」	63ポイント
	3位：イ「児童の状況課題の把握力」	61ポイント

教師を目指す学部生にとって、重要な質問項目である。現職教員が考える「指導力（力量）向上」のために必要な事項と、学部生の意識が一致するのだろうか。学部生の願う指導力（力量）形成の手助けとなりえる項目である。

学部生の希望が理解しやすいよう「横棒グラフ」で表示したが、最多は、男女とも「授業力」であった。真剣に授業力・指導力の向上を願う学部生の意識が読み取れる。2位以下は、男子が「子どもの学習状況、悩み、要求、生活状況などを適切に把握する力」「子どもの集団を把握し、まとめていく力」「子どもの思考や感情を触発し発展させる教師の表現力」であった。女子は「子どもの集団を把握し、まとめていく力」「子どもの学習状況、悩み、要求、生活状況などを適切に把握する力」「子どもの思考や感情を触発し発展させる教師の表現力」であった。まず「授業力」、そして「児童理解力」「学級経営力」につながる指導力（力量）の向上を真剣に考える学部生の姿勢が感じられる結果である。

なお、「その他」として、「事務的なもの」「保護者との連携」が記述されていた。

3. 結果の考察と課題

3.1 結果の考察

- 現職教員に実施した「指導力（力量）向上に関する質問紙調査」と比較する目的で実施した、教員を目指す教員養成学部生への意識調査から、まず明らかになったのは、教員養成学部生の「指導力（力量）」向上への考えと姿勢が、現職教員の持っている「指導力（力量）」向上に対する考え方（意識）と大きな差異がなかったことである。「教員を目指した時期」や「高校で受けた影響」「指導力（力量）向上のために影響したこと」等において、選択順位の逆転は見られたが、高順位の項目は一致し、大きな差異は見られなかった。このことは、教師を目指す学部生が、真剣に教師としての指導力（力量）形成に目を向けていることの表れであると考えられる。
- 現職教員が、日頃指導力（力量）向上の為に心掛けていること（学部生に対しては、心掛けていくであろうと考えること）の選択で、大学生男子、大学生女子、現職教員とも、教材研究等を優先しているが、2位選択では相違した。現職教員が、「授業改善等」

としたのに対し、男女大学生とも「児童記録等」を選択している。このことも、学部生が、児童生徒と向き合いながら、力量を形成していこうとする意識の表れであると考え

- 影響を受けた出来事で、大学生の男女共、小学校、中学校、高校で「教師の人柄」をあげているが、現職教師は、中学校で「学校での経験」、高校では「友人関係」が最多となって、順位の相違が見られた。このことは、教師を目指す学部生が、教職への夢に影響を与えてくれた「教師像」を持っていることの表れであると考え。それだけに、これから教師になる学部生には、一層理想の教師像に近づく学びのカリキュラムの構築が求められていると考える。
- 学生に「教師に採用されたとして、経験豊かな先輩教師にどのような学びを願うか」の質問では、男女とも「授業力の向上のための指導」が突出して多かった。何より教科指導力を身に付けることが、教師としての指導力（力量）形成の基盤となるとの思いからであると考え。2位以下を、大学生男子は「見抜く力」「把握力」「まとめる力」としているが、学級経営の指導力（力量）もまた、教師という職務の基盤であるとの思いからであると考え。

一方、大学生女子は、第2位以下に「まとめる力」「把握力」「表現力」をあげている。男子学生との順位の違いはあるが、やはり、学級経営力の学びを期待している傾向が見られた。教科指導と学級経営での指導力（力量）向上を願う学生の意識の表れであると考え。

3.2 今後の研究課題

本研究では、調査対象の大学生を「2年生」「3年生」とした。調査実施の機会を持てなかったため「4年生」への調査を実施できなかったが、学校現場での「教育実習」を経験した4年生と、これから経験する学部生では、調査結果もまた、変化するのではないかと考える。今後、機会をもうけ、教育実習前と教育実習後の意識の変化について、本研究の趣旨に沿った調査研究を行いたい。教育実習の経験が、一層強く教師を目指す意識に繋がるのではないかと期待を持っている。

次に、臨時的任用教員に対する学部での指導支援である。現職教員に対する意識調査では、臨時的任用教員も対象として協力いただいた。学校現場では、新採用教員の大量採用と同時に、「産前産後休暇」「育児休業」「介護休暇」等取得教員の増加によって、臨時的任用教員の需要が依然として高い状況がある。そして、本学の卒業生もまた、本採用教員を目指しながらも、臨時的任用教職員として勤務している実態が増えてきている。学部として、どのような指導支援が必要であり求められているのか。教師としての指導力（力量）形成のための制度構築も求められていると考える。

最後に、中央教育審議会教員養成部会は、平成27年12月「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」の答申の中で、教員養成改革に関し「教科に関する科目」「教職に関する科目」の区分を撤廃して統合するなど「教職課程の科目を大きくくりすること」（答申 4. 改革の具体的な方向性 (3) 教員養成に関する改革の具体的な方向性）を示している。アクティブラーニングの視点からの授業改善、ICTを活用した指導法、道徳教育や外国語活動の充実など、今日の教育課題に対応することも示している。

注目すべきは、学校インターンシップの導入を提言していることである。筆者は、「教師の力量形成に関する研究—その1」で、本学部が学部開設以来、学校現場での学びを体験することの重要性を位置づけ、「学校ふれあい体験」「学校教育研修生制度」そして、「3年次での教育実習」を制度化してきたことを、まさに、「学校インターンシップ」を先行実施してきたとも言えると、評価した。現在の本学部の教員養成制度を継続することは、教員養成の課題解決に示唆を与えていると言っても過言ではないと考える。同時に、本研究で明らかにしたように、教師を目指す学部生が「指導力（力量）」形成の基盤と考えている「授業力」や「学級経営力」向上の実践的場に直結するものであると考える。

平成28年度内には「次期学習指導要領」の内容が中央教育審議会から答申される予定である。この次期学習指導要領を見据えた学部教育のあり方についても、教師としての「指導力（力量）」向上の視点からの研究が求められている。今後とも、本学部が、「教育力」「実践力」「人間力」を備えた教員養成を目指す学部として、一層発展できるよう、研究と実践に寄与していきたい。

参考文献

- 埼玉大学教育学部、『「力量ある質の高い教員」を目指す養成・研修の在り方に関する調査研究報告書』、2012
- 国立教育政策研究所、『教員の質の向上に関する調査研究報告書』、2011
- 青木幸子、『教員養成課程で育成すべき能力と実践的指導力』、東京家政大学博物館紀要第14集、2009
- 中央教育審議会答申、『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～』、2015、12、21

【教育に関するアンケートご協力をお願い】

平成28年 月 日

昭和50年代採用教職員の定年退職期を迎え、小中学校では、新採用教員が増加し、「どのように経験豊かな教師の指導力を継承していくか」が課題となっています。その一考察の資料といたく、以下の問いにお答えください。なお、無記名での調査とし、本研究目的以外での使用は、行いません。

【研究の目的】

- ① 教師を目指す大学生が、教師としての力量形成をどう捉えているかを考察し、学部教育充実への参考とする。
- ② 教師を目指す大学生が、教師としての資質・指導力向上を図る体験や研修機会をどう捉えているかを考察し、今後の「研修」の参考とする。

【基礎項目】(平成28年4月現在で計算、記入ください。) 大学入学年度(平成 年度)

- ① ご年齢()歳 性別(男、女)
- ② 卒業予定大学等 ア 4年制大学、イ 短期大学、ウ 大学院、エ その他()
- ③ 取得予定の教育職員免許状 ア 小学校教諭1種免許状 イ 中学校教諭1種免許状()
ウ 幼稚園教諭1種免許状 エ その他()
- ④ 受講された研修等 ア 学校ふれあい体験 イ 学校教育研修生 ウ アシスタントティーチャー
エ 介護等体験 オ 教育支援ボランティア カ 放課後子ども教室ボランティア
オ その他()

【質問1】あなたが、教師になろうと決められた時期は、いつ頃でしたか。○をつけてください。

- ア 小学校時代 イ 中学校時代 ウ 高校時代 エ 大学への入学直後
- オ 大学時代(教育実習の前から) カ その他()

【質問2】教職を目指したきっかけを、次のうちから2つ以内選んで、○をつけてください。

- ア 教師との出会い(小、中、高) イ 周囲の人(特に)の勧め
- ウ 大学や学部の選択 エ 教育系大学等への入学へのあこがれ
- オ 職の安定性、将来の経済的安定性 カ 家業の継続を避けるため
- キ 家業を継ぐため ク その他()

【質問3】あなたが、教職を目指した理由を、次のうちから2つ以内選んで、○をつけてください。

- ア 仕事のやりがい イ 教えることが好き
- ウ 教師へのあこがれ エ 経済的な安定
- オ 教師以外の仕事と考えられなかった カ 家業の継続を避けるため
- キ 家業を継ぐため ク その他()

【質問4】あなたが経験された、小学・中学・高校・大学時代の経験で、教員を目指す上で、自分に影響を与えていると思われる出来事をそれぞれ、1つ選び○をつけてください。

- 小学校時代 ア 授業 イ 教師の人柄 ウ 学校での経験 エ 学校外での経験
オ 友人関係 カ その他()
- 中学校時代 ア 授業 イ 教師の人柄 ウ 学校での経験 エ 学校外での経験
オ 友人関係 カ その他()
- 高校時代 ア 授業 イ 教師の人柄 ウ 学校での経験 エ 学校外での経験
オ 友人関係 カ その他()
- 大学時代 ア 授業 イ 教師の人柄 ウ 大学での経験 エ 大学外での経験
オ 友人関係 カ その他()

【質問5】あなたが、教職に就いたとして、教師としての指導力や力量形成に影響を与えると思われる事柄を、あなたにとって、意味の大きい順に1位から3位までをあげてください。

- ()ア 教育実践上の経験(生徒指導、低学年指導、障がい児指導、特定の子どもの出会い、等)
- ()イ 学校への赴任
- ()ウ 学校内での優れた先輩や指導者との出会い
- ()エ 学校外での優れた教員・人物との出会い
- ()オ 学校内での研究活動(校内研修、研究発表会、初任者研修、など)
- ()カ 学校外での研究活動(各種教育研究団体、長期研修、各種講習会、など)
- ()キ 市教育研究会、教育研究集会などの団体内での活動
- ()ク 社会的運動(スポーツやボランティア活動など)
- ()ケ 地域と学校への着目(地域の課題)
- ()コ その他() ※ 裏面にもございます。

【質問6】あなたが、よい授業実践をするために日頃心がけていくと思われることを、1位から3位までの順をつけて、あげてください。

- () ア 研究授業などをできるだけするようにしている。
- () イ 多くの授業を参観するようにしている。
- () ウ 教材の開発や研究を積極的にしている。
- () エ 記録を継続的にとり、子ども理解に努めている。
- () オ 前の授業の振り返りを生かして授業改善している。
- () カ 実践記録を書き、授業を振り返っている。
- () キ 研究会や学会に積極的に参加している。
- () ク 教育関係の本や雑誌を常に読むようにしている。
- () ケ 常に自分で課題を見つけ、授業の改善に向けた努力をしている。
- () コ その他 ()

【質問7】あなたは、教員としての力量としてどのようなものが重要だとお考えですか。1位から3位までの順をつけて、あげてください。

- () ア わかりやすく授業を展開していく力（教材のくみため、話し方、板書）
- () イ 子どもの学習状況、悩み、要求、生活状況などを適切に把握する力
- () ウ 子どもに積極的に関わっていく熱意や態度
- () エ 子どもの資質、適性を見抜く力
- () オ 子どもの思考や感情を触発し発展させる教師の表現力
- () カ 子どもの集団を把握し、まとめていく力
- () キ 子どもの問題や学校の問題を広い視野から見ることのできる度量の広さ
- () ク 必要に応じて、子どもに対して毅然たる態度を取ることができる強さ
- () ケ 芸術や文学に対する豊かな感性や理解
- () コ 同僚と協力しながら教師集団の質を高めていく力
- () サ 教科書の中の教材を様々な角度からとりあげて指導する力
- () シ 教育に関する諸問題を自分なりに筋道を立てて論理的に考えることのできる力
- () ス 教師自身の体育、音楽、図工などの実技能力
- () セ 学校全体の中で自己を位置づけ、その立場から考える力
- () ソ 学校の課題とは直接の関連はないが自分にとって関心のある学問や研究を深めていくこと
- () タ その他 ()

【質問8】あなたが、今後、新採用教員等として勤務するとした時、経験豊かな先輩教師から、どのようなことを学びたいですか。1位から3位までの順をつけて、あげてください。

- () ア わかりやすく授業を展開していく力（教材のくみため、話し方、板書）
- () イ 子どもの学習状況、悩み、要求、生活状況などを適切に把握する力
- () ウ 子どもに積極的に関わっていく熱意や態度
- () エ 子どもの資質、適性を見抜く力
- () オ 子どもの思考や感情を触発し発展させる教師の表現力
- () カ 子どもの集団を把握し、まとめていく力
- () キ 子どもの問題や学校の問題を広い視野から見ることのできる度量の広さ
- () ク 必要に応じて、子どもに対して毅然たる態度を取ることができる強さ
- () ケ 芸術や文学に対する豊かな感性や理解
- () コ 同僚と協力しながら教師集団の質を高めていく力
- () サ 教科書の中の教材を様々な角度からとりあげて指導する力
- () シ 教育に関する諸問題を自分なりに筋道を立てて論理的に考えることのできる力
- () ス 教師自身の体育、音楽、図工などの実技能力
- () セ 学校全体の中で自己を位置づけ、その立場から考える力
- () ソ 学校の課題とは直接の関連はないが自分にとって関心のある学問や研究を深めていくこと
- () タ その他 ()

◇ご協力、本当にありがとうございました。

回答が空欄でも、結構ですので、是非、ご提出ください。



集計表 (一部)

【質問2】 教師を目指したきっかけを、次のうちから2つ以内選んで、○をつけてください。

	選 択 肢	大学2年生		大学3年生		全 体		合 計
		男	女	男	女	男	女	
ア	教師との出会い (小、中、高)	31	16	36	20	67	36	103
		24	7	19	9	43	16	59
		3	2	6	5	9	7	16
イ	周囲の人 (特に) の勧め	7	5	13	6	20	11	31
ウ	大学や学部を選択	11	3	12	11	23	14	37
エ	教育系大学等への入学へのあこがれ	3	1	1	2	4	3	7
オ	職の安定性、将来の経済的安定性	26	14	24	8	50	22	77
カ	家業の継続を避けるため	1	0	0	0	1	0	1
キ	家業を継ぐため	1	2	1	0	2	2	4
ク	その他	5	5	6	5	11	10	21
	無回答	0	0	0	0	0	0	0

(その他回答内容) ・子ども達に伝えたいものがあった。・それまでに出会った教師のようにはなりたくなかった。
 ので。・子どもとのふれあい。出会い。3 ・弟(妹)の勉強をみたから。2 ・一番身近な職業だったから。2
 ・バスケットボールを教えたかったから。 ・妹の成長をみて。 ・子どもが好き。2 ・職業体験をして。3
 ・社会貢献になると考えたから。 ・ボランティアへのあこがれ。ボランティアを通して。2・高校でのふれあい
 体験。 ・自分の特技が活かせると思った。

【質問7】 あなたは、教員としての力量としてどのようなものが◎重要◎だとお考えですか。1位から3位までの
 の順をつけて、あげてください。

	選 択 肢	大学2年生						大学3年生						全 体					
		男			女			男			女			男			女		
		①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③
ア	授業力	21	13	9	11	8	3	31	13	12	26	7	7	52	26	21	37	15	10
イ	把握力	15	15	13	11	7	5	16	13	8	7	7	3	31	28	21	18	14	8
ウ	熱意等	15	10	4	4	3	5	9	9	10	3	5	8	24	19	14	7	8	13
エ	見抜き力	3	1	5	0	1	1	4	8	7	3	5	0	7	9	12	3	6	1
オ	表現力	2	7	7	1	4	4	2	3	5	0	3	4	4	10	12	1	7	8
カ	まとめ力	4	6	10	2	3	4	3	8	11	0	6	5	7	14	21	2	9	9
キ	度量広さ	3	9	1	2	2	2	2	3	6	1	4	3	5	12	7	3	6	5
ク	毅然態度	2	3	5	2	3	4	4	9	10	0	2	6	6	12	15	2	5	10
ケ	感性理解	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	1	0	0	0
コ	協調力	0	3	4	0	4	5	3	3	2	0	3	2	3	6	6	0	7	7
サ	教科力	0	1	5	1	0	1	0	2	0	1	0	0	0	3	5	2	0	1
シ	論理力	1	0	0	1	0	0	1	3	2	0	0	0	2	3	2	1	0	0
ス	実技力	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1
セ	位置理解	0	0	3	0	1	0	0	3	0	0	0	2	0	3	3	0	1	2
ソ	学問研究	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	1	1	0	1	1
タ	その他	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	1	1	0	0	0
	無回答	0			1			7			6			7			7		

(その他回答内容) ・課題処理能力。 ・無記入。